

1 生徒の実態

(1) 学習状況調査結果の推移

R 6 入学 現 3 年生	国語		数学		英語
	2 年時	3 年時	2 年時	3 年時	3 年時
	県	全国	県	全国	全国
	5 4.3	5 9.0	4 4.5	4 9.0	4 6 8
	(0.8 9)	(0.9 5)	(0.8 5)	(0.9 1)	
R8 正答率の全国比		0.9 2		0.8 5	

◎ 2 年時は佐賀県小・中学校学習状況調査、3 年時は全国学力・学習状況調査の推移。

◎ 上段は平均正答率、下段()は県平均を 1 としての比較。

◎ 「令和 8 年正答率の全国比」は全国平均を 1 としての比較。

◎ 「中学校英語」は、3 技能「聞くこと・読むこと・書くこと」を統合した IRT（項目反応理論）に基づいて算出した IRT スコアを表示。

(2) 学習状況調査・意識調査から読み取れる実態

・国語科では、すべての問題で全国の平均正答率を下回った。特に「文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものにすることができる」（読むこと）が 12.7 ポイント低い。「読むこと」の指導が必要で、思考力・判断力・表現力の強化が求められる。数学科では、「具体的な場面において、正の数と負の数を用いて変化や状況を表すことができる」（知識・技能）が 1.4 ポイント高い、「総合的・発展的に考え、事柄の特徴を数学的な表現を用いて説明することができる」（思考・判断・表現）が 11.6 ポイント低い。根拠や理由をもとに筋道を立てて説明する力を伸ばす必要がある。

・意識調査では、「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学びを考え、工夫することができている」、「放課後や学校が休みの日に、本を読んだり、借りたりするために地域の図書館に行く」に肯定的な回答をした生徒の割合が全国平均より高い。一方、「先生は、あなたのよいところを認めてくれている」、に肯定的な回答をした生徒の割合が全国平均より低い。また、休日に家庭学習に費やす時間が短い生徒の割合が高い。

2 改善に向けた具体的な取組

(1) 授業づくり、指導方法の改善・充実のための重点取組

・「授業づくりのステップ 1・2・3」等の授業改善リーフレットを活用した取り組みを推進する。

・ICT の効果的な活用法を高めていく。また、個別最適な学びと、協働的な学びの充実を図る。

・授業において「見通し」や「振り返り」の場面を設定し、主体的な学びにつなげる。

・実力テストに合わせて学習強化期間を設けたり、定期テストに向けた計画的な学習を進めたりするなど、家庭学習の内容と質の改善を目指す。また、各教科において、タブレットドリル活用して基礎・基本の学習を繰り返し行い、定着を図る。

(2) （授業以外）児童・生徒の課題改善のための重点取組

・朝の会や帰りの会等でフォーサイト手帳を活用して、見通しを持ち、自ら進んで学習や生活に取り組むことができるように支援する。タブレットドリルの活用により、家庭でも自分の学習を振り返り、予習・復習を進めていくように支援していく。

・「家庭学習の手引き」の配布、学校 HP への掲載を通して保護者と共に学ぶ意欲や姿勢を高めていく。

・朝読書や無言掃除を通して落ち着いた教室の雰囲気での授業を開始していく。

・各種行事において、生徒が主体的に取り組む場面をこれまで以上に設定し生徒のよさを認めていく。

1 生徒の実態

(1) 学習状況調査結果の推移

R 6 入学 現 3 年生	国語		数学		英語
	2 年時	3 年時	2 年時	3 年時	3 年時
	県	全国	県	全国	全国
	64.6	68.0	60.6	60.0	480
	(1.06)	(1.10)	(1.15)	(1.11)	
R8 正答率の全国比		1.06		1.05	

◎ 2 年時は佐賀県小・中学校学習状況調査、3 年時は全国学力・学習状況調査の推移。

◎ 上段は平均正答率、下段()は県平均を 1 としての比較。

◎ 「令和 8 年正答率の全国比」は全国平均を 1 としての比較。

◎ 「中学校英語」は、3 技能「聞くこと・読むこと・書くこと」を統合した IRT（項目反応理論）に基づいて算出した IRT スコアを表示。

(2) 学習状況調査・意識調査から読み取れる実態

○学習状況調査【3 教科共通】に読み取れる実態

- ・全国や県と比べると、平均正答率が高い。
- ・無回答率が、全国や県と比べると低い。

○学習状況調査【国語】から読み取れる実態

- ・学習指導要領の内容、知識及び技能の 3 つの事項のうち(1)言葉の特徴や使い方に関する事項は全国平均よりやや低いが、それ以外は佐賀県と全国の平均正答率より高い。
- ・学習指導要領の内容、思考力、判断力、表現力等の 3 つの事項は、佐賀県と全国の平均正答率より高い。
- ・問題形式では、選択式、短答式、記述式いずれも正答率が高い。

○学習状況調査【数学】から読み取れる実態

- ・学習指導要領の領域の 4 つの事項のうち B 図形は佐賀県、全国平均よりやや低いが、それ以外は佐賀県と全国の平均正答率より高い。
- ・問題形式では、短答式、記述式いずれも正答率が高い。・学習指導の領域のすべての項目において、正答率が高く、佐賀県と全国の平均正答率を上回っている。
- ・問題形式では、短答式と記述式の正答率が高いが、選択式の正答率が低い傾向にある。

○学習状況調査【英語】から読み取れる実態

- ・CBT への入力スキルが高い生徒が多い。
- ・音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、聞くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けているかどうかをみる問題の正答率が高いが、日常的な話題について、自分の置かれた状況などから判断して、必要な情報を読み取ることができるかどうかをみる問題の正答率は低い。

○意識調査から読み取れる実態

- ・「毎日同じくらいの時刻に寝ていますか」や「朝食を毎日とっているか」の質問では、肯定的な回答の割合が高く、生徒は良好な生活リズムができていることがうかがえる。

- ・授業ではほぼ毎日タブレット端末などの ICT 機器を使って学習した生徒の割合が高く、自分の考えをまとめ、発表する場面で積極的に活用していることがうかがえる。
- ・「1 日当たりどれくらい家庭学習をしますか」では、平均 1 時間 3 0 分程度となっており、「1 日当たりどれくらいスマートフォンやタブレットで SNS や動画視聴をしますか」では、平均 2 時間程度の視聴があり、家庭学習の時間が少なくなる理由の一つと考えられる。また、家庭学習に ICT 機器を活用している生徒の割合は高い。
- ・「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできますか」に肯定的に答えた生徒は 87.1% と割合は高い。
- ・「人が困っているときは、進んで助けますか」に肯定的に答えた生徒は 100% であった。
- ・人の役に立つ人間になりたいと考える生徒の割合が高い。
- ・「新聞を毎日読んでいない」や「普段読書をしない」生徒の割合は高い。
- ・国語、数学、英語の勉強が好きな生徒の割合は高いが、授業で学習したことを今後の学習で活用しようとする生徒の割合は低い。

2 改善に向けた具体的な取組

(1) 授業づくり、指導方法の改善・充実のための重点取組

- ・各教科においてタブレット端末などの ICT 機器を有効に活用し、他者とかかわる活動を仕組んだ「個別最適な学び」と「協働的な学び」につながる授業づくりを研究し、全職員が実践する。
- ・各教科の授業で、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表する機会を増やす。
- ・各教科の学習内容が、日常生活の中でどのように生かされているのか、具体的な事象をもとに実習する機会を増やす（修学旅行、職場体験、地域奉仕活動など）。
- ・電子黒板にモデルやリード文を示し、書くことが苦手な生徒にも、取り組もうとする意欲や上手に書けたという成功体験をもたせるように工夫する。
- ・定期テストや課題テスト等で記述式の問題を増やしたり、振り返りをタブレット端末で文章表記させたりして、文章を書く機会を増やす。
- ・学級活動や特別の教科道徳の授業では、自己肯定感を高める教材を計画的に取り扱っていく。

(2) （授業以外）児童・生徒の課題改善のための重点取組

- ・生徒会活動において、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表する機会を増やす。
- ・ICT スキルの向上のためにタイピングの練習を取り入れる。
- ・授業中の姿勢、机上の準備、話の聞き方、発表の仕方などの学習規律を高める。
- ・フォーサイト（ふりかえり力向上手帳）を活用して、計画的に家庭学習に取り組ませる。
- ・学習内容の定着に向けた朝の活動（名称は北中クリエイティブタイム：主にタブレットドリル学習）を毎日実施する。
- ・学級活動で話し合い活動や、レクリエーションの企画などを通して、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表できる場を増やす。
- ・行事等で係活動や役割に責任をもたせ、コミュニケーション能力を高める手立てをとる。
- ・学校生活全般の中で、生徒自身が自ら選択する自己決定の場面を意識的に設定する。
- ・生徒に図書室利用を促進し、常に新聞閲覧ができるようにする。
- ・デジタルデトックスデーを設定し、保護者にも周知する。

1 生徒の実態

(1) 学習状況調査結果の推移

R 6 入学 現 3 年生	国語		数学		英語
	2 年時	3 年時	2 年時	3 年時	3 年時
	県	全国	県	全国	全国
	51.4	50.0	42.0	46.0	44.3
	(0.84)	(0.81)	(0.80)	(0.85)	
R8 正答率の全国比		0.78		0.81	

◎ 2 年時は佐賀県小・中学校学習状況調査、3 年時は全国学力・学習状況調査の推移。

◎ 上段は平均正答率、下段()は県平均を 1 としての比較。

◎ 「令和 8 年正答率の全国比」は全国平均を 1 としての比較。

◎ 「中学校英語」は、3 技能「聞くこと・読むこと・書くこと」を統合した IRT（項目反応理論）に基づいて算出した IRT スコアを表示。

(2) 学習状況調査・意識調査から読み取れる実態

・令和 8 年度の 3 年全国学習状況調査(以下「同」とする)では、国語の問題番号別にみると、3 (2)「表現の効果を考えて描写することができるかどうかをみる」問題の本校正答率が 92.9%で、県 92.4%より 0.5%高い。しかし、4 (3)「目的に応じて必要な情報に着目して要約し、内容を理解することができるかどうかをみる」問題の本校正答率が 42.9%で、県 66.3%より 23.4%低い。国語の観点別にみると「知識・技能」の本校正答率が 51.2%で、県 62.3%より 11.1%低い。「思考・判断・表現」の本校正答率が 50.0%で、県 61.6%より 11.6%低い。

・同の数学の問題別にみると、4「反比例の関係を表す表の特徴を捉えて、 x の値に対応する y の値を求めることができるかどうかをみる」問題の本校正答率が 60.7%で、県 50.9%より 9.8%高い。しかし、6 (3)「総合的・発展的に考え、事柄の特徴を数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる」問題の本校正答率が 17.9%で、県 42.8%より 24.9%低い。数学の観点別にみると「知識・技能」の本校正答率が 54.2%で、県 59.9%より 5.7%低い。「思考・判断・表現」の本校正答率が 19.6%で、県 34.8%より 15.2%低い。

・同の英語の問題別にみると、[英語 3 技能]の本校正答率が 44.3%で、県 45.7%より 1.4%低い。「聞くこと」問題の本校正答率が 50.0%で、県 55.0%より 5.0%低い。「読むこと・書くこと」問題の本校正答率が 42.0%で、県 42.0%で同じ割合である。

・3 教科で共通して、知識・技能的な基礎的問題に対して、生徒が理解できるまで個に応じた学習を重ね、反復学習をすることで、理解の定着がみられた。しかし、思考・判断・表現的な応用的問題に対しては、問題文の取り違い、解法の手順の誤り、途中で意味や解法が分からなくなるなど、学習理解と解き方の課題がみられた。特に、記述式の問題形式では、正答率が低い傾向がみられた。そのため、思考力を伴う問題では、より丁寧な教師の解説、生徒同士の学びあいを充実させるとともに、指導場面に応じたデジタルとアナログの教材を試みるなど、生徒一人ひとりの理解の程度を大切にして、計画的な学習指導を進めていきたいと考えている。

・令和 8 年度の 3 年全国学習状況調査の生徒質問(22)の「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか」で、「できている。どちらかといえばできている」の本校生徒の割合は 82.2%(県 79.9%)で、県より 2.3%高い。さらに、同(42)の「学級の生徒との間

で話し合い活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」で、「当てはまる。どちらかといえば当てはまる」の本校生徒の割合は 92.8%(県 86.8%)で、県より 6.0%高い。これらは、日頃の先生方の探究的活動を取り入れた授業実践、学級学年経営の取り組みの成果でもある。

2 改善に向けた具体的な取組

(1) 授業づくり、指導方法の改善・充実のための重点取組

・本年度は「自ら学びを拓き、ともに対話を深める生徒の育成」を校内研究の主題とした。「授業づくり部会(全教科で単元の見直しを示すスライド活用を通して、毎時間の終わりに学習内容とプロセスを振り返る活動を実施した)」と「学級づくり部会(対話力アップを目的としたトレーニング：川中タイムを導入した)」の両輪で、実践を重ねている。その結果、生徒自身が学習状況をメタ認知し、次の学習への見通しをもつ姿が見られた。また、他者受容の精神が育まれ、普段交流の少ない生徒同士が笑顔で対話する場面が増えた。

・授業では、タブレットとクラウド環境を活用し、話し合い活動を取り入れ、生徒同士、生徒と教師、AIの活用を通して、生徒は、自分の考えを他者に伝え、比較検討して、自身の考えが深まる学習環境を整えていく。その方法として、ワークシート、スプレッドシートやスライドなどを提示した電子黒板、ホワイトボードで伝える活動を進めている。

・7月29日(水)の校内研修会で、2年生の県の学習状況調査を踏まえ、各教科で以下の対策を行うことを検討し、全職員で共通理解を図り、全教科の学習指導につなげていきたいと考える。

①国語では、良い点として「漢字の書き取り」「表現の効果について根拠を明確にしている」「条件のある記述問題」と考えた。改善点として「単語や文節などの文法問題」「話し合い活動の中で、他者の意見に触れ、自分の意見を述べる」があり、その対策として「丁寧に時間をかけながら、知識の定着を図る」「朝の会・帰りの会などで教師側が意図的に条件設定を行う。発言に対して質疑応答を行う」ことを指導し、個に応じた支援することが必要である。②数学では、良い点として「式と計算分野は全国平均正答率より高く、理解が示されている」と考えた。改善点として「関数や、図形分野の正答率が低く、数学的事象をイメージする力が低い。また、0.25の生徒が問題を正確に読み取れていない」があり、その対策として「授業の中で、図や表、グラフを視覚的に確認する」「操作できる活動を多く取り入れる」ことを指導し、問題の場面設定の工夫、学びの共有化と具体化に取り組むことが必要である。③英語では、良い点として「語彙、語形が読み取れ、視覚的な問題は答えやすい」「基本的な文の理解力はある」と考えた。改善点として「長文でのリスニング力が低い。リスニングが1回示された場合に読みとれない。要点の把握力が弱い。自分の考えを英作文で表現することが苦手である」があり、その対策として「ポイントをおさえて聞いたり、読んだりする」「基本文型を使ったQ&A形式の繰り返し練習」を指導し、帯学習と反復学習、言語活動に力を入れることが必要である。これらのことを念頭に置き、自分の教科に置き換えて考え、全職員で指導に役立たせる。

(2) (授業以外) 児童・生徒の課題改善のための重点取組

・令和5年度から実施している「川中タイム」を4年目として、6月から(週1回、水曜日の朝8:00～8:10)各学年で実施している。また、各学年で、小グループでの発表の機会を設定し、生徒に聞き方と話し方の両方の役割を務めさせ、生徒自身の考えを相手に伝える力を高めている。さらに、「成果物づくり(川中タイムでクイズやポスターなどの作成)」にも取り組んでいる。

・「ミライシード(個別学習、協働学習、教育効果の可視化)」は、各教科の中で、授業や家庭学習を通して、さらに全校一斉に、期末考査前の朝の時間(8:00～8:15)と帰りの時間(15:55～16:10)を使い、定期的に取り組んでいる。

・川登中校区、小中連携の「学びの連携部」の取り組みとして、家庭学習強化週間を年に2回(6月、11月)設定して、生徒会を中心とした学習の呼びかけ、アンケートを使い、学習意欲を確認している。また、小中学校の3校で、自学ノートの頑張りを各校で掲示し、より学びの質を高めている。

1 生徒の実態

(1) 学習状況調査結果の推移

R 6 入学 現 3 年生	国語		数学		英語
	2 年時	3 年時	2 年時	3 年時	3 年時
	県	全国	県	全国	全国
	61.8%	66.0%	47.0%	54%	445
	(1.01)	(1.06)	(0.90)	(1.00)	
R8 正答率の全国比		1.03		0.95	

◎ 2 年時は佐賀県小・中学校学習状況調査、3 年時は全国学力・学習状況調査の推移。

◎ 上段は平均正答率、下段()は県平均を 1 としての比較。

◎ 「令和 8 年正答率の全国比」は全国平均を 1 としての比較。

◎ 「中学校英語」は、3 技能「聞くこと・読むこと・書くこと」を統合した IRT（項目反応理論）に基づいて算出した IRT スコアを表示。

(2) 学習状況調査・意識調査から読み取れる実態

- ・ 本校の平均正答率と県正答率において、国語では上回っており、数学ではほぼ同じであり、英語ではやや下回っている。
- ・ 国語では思考判断表現の正答率が高い。「書くこと」に苦手意識を持っている生徒が多く、短答式・記述式の問題の正答率が低い。
- ・ 数学では問題場面を読み取り、問われていることを理解し解答を導くことができている。記述式の問題の無解答率が高く、問題解決の方法を数学的に説明したり、筋道を立てて説明したりすることが苦手な生徒が多い。
- ・ 英語では短い文章を読み取る力の定着が見られた。全体的に無解答率は低い。自分のことを英語で表現する問題に苦手意識を持っている生徒が多い。

2 改善に向けた具体的な取組

(1) 授業づくり、指導方法の改善・充実のための重点取組

- ・ 国語科では学校全体で振り返りを共有する。多角的な視点や提案を含む作文問題や、行事等のタイミングをとらえた記述課題を実施する。
- ・ 数学科では、基礎基本の定着を図るために、既習事項を復習する時間を設定する。記述式の問題に多く取り組み、慣れさせるとともに、問題解決のための筋道を考察する練習をする。
- ・ 英語科では基本的な単語や文型の定着を図る。帯活動として 3 行英作文を実施する。家庭学習でも「書く活動」を意識した活動ができるよう内容を工夫する。

(2) （授業以外）児童・生徒の課題改善のための重点取組

- ・ 学習タイムを利用し、英語と数学の補充学習を実施する。
- ・ 自学ノートの取り組みにおいて、生徒自身が自主的に学習内容を選択するものだけでなく、意図的に取り組む教科領域を教科担当者が指定する課題を設定し、自学ノートの質を高める。
- ・ 学年集会や学活を利用し、効果的な自学ノートへの取り組み方講座を実施する。

1 生徒の実態

(1) 学習状況調査結果の推移

R 6 入学 現 3 年生	国語		数学		英語
	2 年時	3 年時	2 年時	3 年時	3 年時
	県	全国	県	全国	全国
	55.9	58	50.1	48	460
	(0.92)	(0.94)	(0.95)	(0.89)	
R8 正答率の全国比		0.91		0.84	

◎ 2 年時は佐賀県小・中学校学習状況調査、3 年時は全国学力・学習状況調査の推移。

◎ 上段は平均正答率、下段()は県平均を 1 としての比較。

◎ 「令和 8 年正答率の全国比」は全国平均を 1 としての比較。

◎ 「中学校英語」は、3 技能「聞くこと・読むこと・書くこと」を統合した IRT（項目反応理論）に基づいて算出した IRT スコアを表示。

(2) 学習状況調査・意識調査から読み取れる実態

【国語】

- ・観点別に正答率をみると、「知識・技能」「思考・判断・表現」に大きな偏りはないが、内容別に見ると「情報の扱い方に関する事項」は県や全国の正答率を上回っているのに対し、「言葉の特徴や使い方に関する事項」の問題に課題が見られる。
- ・「投げられる」を文法的に説明する問題の正答率が 54.5%と、県の正答率 68.1%を大きく下回った。文法の知識の定着ができていないと考えられる。助動詞「られる」、ら抜き言葉、に関する問題の正答率も低く、単語の識別に苦手意識があると思われる。
- ・表現の工夫、効果に関する正答率が低かった。言葉が文脈においてどのような役割を果たし、効果があるのかを言語化することに課題が見られる。

【数学】

- ・観点別に正答率をみると、「知識・技能」の観点で県、全国に比べて差が見られる。領域別にみると、「図形」「データの活用」の領域が他領域に比べて大きく下回っており課題が見られる。
- ・関数の領域で、式やグラフを求めたり、与えられた表やグラフから必要な情報を読み取ったりする問題の正答率は低くないが、グラフの情報から問題解決の方法を数学的に説明する問題では、無回答率が高い。
- ・2 直線が平行になるための条件を問う問題で県平均を大きく下回った。図形の中で錯角の関係にあるものを答える問題で難易度は高くないが、平行四辺形になる条件を解答したものが多かった。

【英語】

- ・与えられた場面や情報から活用すべき文法事項を判断して英文を書く設問において、県、全国の正答率を 10 ポイント以上下回っている。与えられた情報に基づいて、留学生の昨日のできごとを説明する英文を書く設問では、過去形ではなく、現在形や現在進行形、完了形などを用いて解答している誤答が多い。また、「主語＋動詞」という文構造を理解せずに解答している誤答も多い。身につけた文構造や文法事項等の知識を正しく用いたり正しい語順で文を構成したりすることに課題が見られる。

【意識調査】

- ・学校の授業以外に、普段勉強している時間を問う質問では、平日 1 時間以上、休日 2 時間以上の学習時間が確保できている生徒の割合が、全国や県平均と比べて高い。
- ・読書をする時間や学校図書館を利用する回数を問う質問では、どちらも全国や県の平均より高く、家庭内に本がある環境の生徒の割合が高い。
- ・ICT 機器に関する質問、話し合う活動を通して自分の考えを深めているかを問う質問は、例年に引き続き高い傾向にある。
- ・質問項目「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」「あなたの学級では、人と違う意見を言っても否定されないと思いますか」では、肯定的な回答が全国および県平均を 20 ポイント教上回った。否定的な回答がなかったことから、受容的な雰囲気づくりができていていると思われる。
- ・電子機器（スマートフォンやゲーム機など）の使用時間が比較的長く、就寝時間が一定でない。

2 改善に向けた具体的な取組

(1) 授業づくり、指導方法の改善・充実のための重点取組

【共通】

- ・主体的に学習に取り組む態度の育成を図るために、生徒の身近にある話題と授業の内容を結び付けるなどして、生徒の興味・関心を高める授業を展開する。
- ・授業の中で理由を説明したり、批判的に考察し判断したりできるような問い返しを行い、生徒が身に付けた知識や技能を活用して考えるような場面を設定する。

【国語】

- ・知識事項を定着させる時間を設ける。帯単元で文法や漢字の問題を解き、知識事項の定着を図る。また、タブレットドリルも活用する。漢字を覚える際には、形だけでなく意味や用法まで調べるようにする。
- ・文章の内容だけでなく、筆者がどのような効果を意図してその言葉を使っているのかにも着目して文章を読む。文章全体の表現の特徴などについて、自分の考えをまとめて、友達と共有する時間を設ける。

【数学】

- ・答えを出すのみにとどまらず、どのように求めたのかプロセスを共有する。また、自分の考えを言語化したり、数学用語を使って正しく説明したりする場面を簡単な問題から設定する。
- ・論証の授業の中では既習事項と正しく結びつけるような問い返し等を行い、繰り返し定着を図る必要がある。既習事項の振り返りを行い、生徒の実態確認を丁寧に行いながら授業を進める。
- ・授業の内容が定着するように小テストなどを定期的実施する。

【英語】

- ・場面や状況から活用すべき文法事項などを判断させる場面を設定する。場面と関連付けて文法事項などを活用して英語を書き、いつ使えるかなど使い方を把握する活動を取り入れる。
- ・既習の文法事項などを適切に使い分けができるように、新しい文法事項を扱う際は関連のある文法事項をまとめて整理し、共通点や相違点を考えさせる活動を取り入れる。

(2) (授業以外) 児童・生徒の課題改善のための重点取組

- ・自分の考えや意見を考えたり、まとめたりするについては前向きに取り組もうとする生徒が多いが、知識や既習事項を幅広く活用して考えることはできていない。教科横断的に知識や既習事項をつなぐことを授業だけでなく、学校行事等でも意識して取り組む。
- ・授業内で行った自己評価と振り返りをもとに、生成 AI による家庭学習の提案を行い、授業と家庭学習をつなぐような取り組みを実施する。